或問　WAKUMON　1
No.11,（2006）pp.1-13

江戸時代における清朝中国人の画像資料

松浦　章

I　緒言

浙江工商大学日本文化研究所は、2006 年 3 月 27 日「中国文献にみられる日本画像資料」をテーマにしたシンポジウムを開催するに当たり「中国の文献にみられる日本の地図・人物像・器物等といった画像資料を整理研究することを通じて、中国人の日本研究史や日本認識の一端をより立体的に明らかにすること」との主旨を掲げられた。

これまでの日中関係史の研究が文献、特に文字資料を中心に多くの成果を上梓し研究を進展させてきた。ところが、今回のシンポジウムは、画像資料に着目して新たな歴史像を探求しようとされる慧眼に対して敬意を表すると共に、既に今回のシンポジウムで報告された研究にも極めて興味をそそられるものである。

しかし、永きにわたって中国文化を受容し、また憧憬の念を懐き続けてきた日本の特に江戸時代にも多くの中国に関する画像資料が残されているが、これまであまり注目されてこなかった。視点を変えれば「日本文献にみられる中国画像資料」として重要な意味をもつものであろう。そこで、今回のシンポジウムとは逆の視点から日本に残された資料から中国に関する画像資料を検討してみることも必要と考え、若干の私見を提示したい。

その具体的試みとして、江戸時代の日本に実際に来航した中国の人々の具体的事例、特に中国商人の絵姿に着目して、江戸時代日本人の中国像、中国観を考える契機としたい。江戸時代を選択した最大の理由は、具体的な中国人の画像が残されていることである。今日のように写真や、デジタル機器の無い時代にあっては絵画が、現代のそれらに替わる重要な役割や意味を持っていた。そのことは既に「長崎版画」に描かれた唐船、即ち中国船が事実に基づいて描かれたものであったことを考証したことからも言える。[1]

そこで先ず、画像資料に残された中国の人々の具体事例として、貿易船に搭乗して長崎に来航した中国商人の中から姓名とその姿形の明らかな人物を抽出して述べてみたい。

---

[1] 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002 年 1 月、307～323 頁。

Ⅱ　書籍、長崎版画に見る清朝中国人の画像

江戸時代は今日のような写真技術が無く、写真の焼き増しのように大量に刷られたのは版画である。日本の中でも同一地域を対象に大量に刷られたのは長崎の風景、長崎に来航した外国人の人物、船舶、物資に関してあろう。それらは一般に「長崎版画」と呼称され流布した。その中でも唐人として、長崎に貿易のために来航した清朝中国人の画像も含まれていた。

「長崎版画」に触れる前に、版画以外の書物や写本等に見られる清朝中国人の画像の一端について触れてみたい。

1）書籍に見られる清朝中国人の画像

長崎の西川如見が著した宝永六年（康熙四十八、1709）序の『増補華夷通商考』巻一に「清朝人物像」（図 1）が描かれ、「今中華皆同于此」と、即ち現在の中国人は皆この図と同じであるとする注記が見られる。この図から明らかに明朝の袖口の広い服装とは異なり、満洲族の袖口の細い衣服を着た男女を描いている。男性は辮髪であったろう。帽子も明朝時代のものとも異なる形状である。江戸前期の清朝中国人を描いた図としては貴重なものであろう。

図 1 西川如見『増補華夷通商考』巻一

図 2　臨写「江南巡幸圖」より

長崎にもたらされた絵画資料から模写、臨写された資料からものとした確認されるものに乾

隆帝の江南巡幸圖からのものと思われるものが記録されている。[2]馬上の官吏の図（図 2）であるが「前呼侍衛　都而四十騎」と、前衛の侍衛が全てで四十騎あったと注記する図と、この他に、下馬して馬を引く官吏の図と総督の図と後擁侍衛の図、女騎として女性が騎馬してそれに続いて八人で輿を担ぐ図の計五図が描かれている。[3]

書物の中に描かれた清朝中国人の絵姿について、人物が特定できる例について述べてみたい。水戸藩士であって、後に地理学者としても知られる長久保赤水は、彼の『長崎行役日記』に清朝中国人の姿を描いている。

明和二年（乾隆三十、1765）十一月に水戸藩磯原村の廻船が遭難し、沖船頭の佐平太等は安南国に漂着し會安（ホイアン）で撫育され、會安から明和四年（1767）七月十六日に長崎に来航した船主曹體三、王世吉の四番安南船で帰国した。[4]その帰還者を水戸から迎えの役人として、明和四年十月に長崎に赴いたのが長久保赤水であった。彼の長崎滞在は十月十二日から十七日までの僅か六日間であったが、十月十四日の条に、唐人屋敷を見物に行き、偶然中国人等の様子を垣間見ることとなる。

> ･･･唐人ども十人ばかり此邊に徘徊して相共に笑語す。唐音の中に和語を用うる者もあり。その人物賤しからず。面體この方の人にかはらず。しかれ共頭髪を剃りて百會の所を徑二寸ほど圓く剃残したる髪の毛を三組にして、羽織の紐に似たるを後へ垂れ下る。帽は鍪頭巾のしころなき様なる物也。頂の尖の所へ赤き絹糸の如くなるを括り付け、猩々の髪のやうに散し下す。外套は此方の半合羽に似て前を釦じめにし、裙は裳の兩脇を合せず、前垂を前後より懸けたる如くみゆ。凡て清朝は韃風にて公卿大夫に至る迄、衣冠を用いず。此風俗也と云。[5]

と、長久保赤水にとって初めて実見する中国人の様子を、その会話とその中に時折まじえた日本語会話のこと、容貌や見目姿、特に髪型の弁髪、服装の状況など事細かに描写し、彼等は満洲族の風俗習慣によるものと記しているのである。

長久保赤水『長崎行役日記』中の明和四年十月十四日の条には、二人の中国人の姿を記録し残している。游樸菴（図 3）と龔廷賢（図 4）の二人である。

游樸菴は、明和二年（1765）五月三十日入港の酉八番船主、明和四年四月九日入港の亥一番船主、明和七年十一月十日入港の寅十三番船主、明和八年十二月一日に入港したが、既に十三

---

[2] 松浦章「乾隆南巡と日本－舶載資料を中心に－」『阡陵（関西大学考古学資料室彙報）』No.12、1985 年 11 月。

[3] 内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二『視聴草』第十一巻、汲古書院、1985 年 11 月、206～208 頁。

[4] 『長崎実録大成』巻十二、『長崎文献叢書　第一集第二巻　長崎実録大成正編』長崎文献社、1973 年 12 月、307～311 頁。

[5] 『続々紀行文集』博文館、明治三十四年十月、502～503 頁。

隻の限度を越えていたので翌年安永元年の辰二番船に番立され、その船主であった。安永元年十二月十五日入港の辰十二番船主、安永三年（1774）午四番船主[6]まで十年間に六度の長崎来航の中国船主として知られる貿易商人であった。

龔廷賢の名で長崎来航の船主名は見えないが、明和四年に来航していた船主として龔克賢が知られる。おそらく龔廷賢と龔克賢とは同一人物であったろう。

龔克賢の名では、明和三年（1766）七月十四日に長崎に入港した戌十二番船主、明和四年七月二十二日入港の亥五番船主が知られる。[7]この他に同姓の龔紫興、龔允譲が明和・安永年間の来航船主として知られる。[8]これらも同族の関係者であったろう。

図 3 龔廷賢の図

図 4 游樸菴の図

長久保赤水のように実見した期日も明らかな例は多くないが、当時の日本人、特に長崎の人々が実見したものとして描いた中国人の絵姿は「長崎版画」として広く普及したようである。

寛政十一年（嘉慶四、1799）に刊行された『清俗紀聞』は、寛政七年より同九年まで長崎奉行を勤めた中川忠英[9]の指示によってまとめられた貴重な中国記録である。『清俗紀聞』は巻一、

---

[6] 「明安調方記」、『長崎県史　史料編第四』吉川弘文館、1965 年 3 月、565、567、568、569 頁。

[7] 「明安調方記」、『長崎県史　史料編第四』吉川弘文館、1965 年 3 月、565 頁。

[8] 「明安調方記」、『長崎県史　史料編第四』吉川弘文館、1965 年 3 月、565、566、567、568、569、570、571 頁。

[9] 『長崎志続編』巻一、「歴代御奉行在任井上使御目付到着之部」、『長崎文献叢書第一集・第四巻続長崎實録大成』長崎文献社、1974 年 11 月、2 頁。

年中行事、巻二、居家、巻三、冠服、巻四、飲食、巻五、閭学、巻六、生誕、巻七、冠礼、巻八、婚礼、巻九、賓客、巻十、羈旅、巻十一、葬礼、巻十二、祭礼、巻十三、僧徒に分け図入りで中国社会の諸相を説明する貴重な書籍であるが、これらの図にしばしば清朝中国人の画像が見られる。ここに掲げたのは巻一「年中行事」に見られる「太歳春牛迎春」図（図 5）である。

文化二年（嘉慶十、1805）刊の『唐土名勝圖會』は、巻一、輿地圖説、巻二、皇城、巻三、内城総圖、巻四、外城、巻五、順天府、河間府、巻六、天津府、正定府、順徳府、廣平府、大名府、宣化府等の北京を中心に直隷省を記述している。現在の北京市と河北省に相当する。この中で建築、風景図などあるが他に人物像が見られる、その一例として朱竹垞の図（図 6）があるが、これらはおそらく輸入書籍を参考に図式したものと思われる。朱竹垞は朱彝尊の号であるが、朱彝尊は 1709 年（康熙四十八、宝永六）に没しているから、『唐土名勝圖會』が刊行される約 100 年前の人であることから、この場合は明らかに輸入書籍や絵画を参考に掲載したことは明らかである。

図 5　『清俗紀聞』巻一「年中行事」より

図 6『唐土名勝図会』巻一

2）長崎版画に見られる清朝中国人の画像

さらに、長崎に渡来した清朝中国人の画像を版画にして出版し、長崎に来た日本人の郷里へのお土産として、今日の人々が絵葉書を旅行先で購入して帰郷後友人等に進呈するようなものであったであろうと思われる。そのような用途で多くの長崎版画が刷られた。

江戸前期の長崎絵、長崎版画として知られるのが長崎桜町にあった長崎絵最古の版元とされ

る針屋であり、針屋版の現存のものに「大清人」が知られる。[10]それが図 7 である。これらの長崎版画を多く刷った版元には、富嶋屋や大和屋などがあった。[11]

富嶋屋は長崎絵の先駆とされる豊嶋屋（としまや）で明和年間から文政中期までの半世紀が知られ、晩年に富嶋屋と名乗ったとされる版元である。

大和屋は享和年間から知られ、その店を継ぐのが磯野文齋で、彼は天保年間から安政年間まで活躍している。弘化版『長崎土産』の作者として知られる。

この内、大和屋版の長崎版画に幾種類かの「唐人図」が知られ、大和屋の活動した時期から、江戸後期に刊行されたものと思われる。

そこで「長崎版画」の中から清朝中国人を描いたものを、東京国立博物館が所蔵する版画の中から掲載したのが次の図 8～図 13 である。

「唐館書房之図」（図 8）は唐人屋敷の中の一室での中国人の読書風景を描いている。**「大清朝人」**（図 9）はおそらく船主と思われる人物が随使を連れて長崎市中を歩行中の姿を描いたものであろう。**「唐人図」**（図 10）ともう一枚の**「唐人図」**（図 11）は上部に唐船の絵を添えたものでいずれも長崎版画の有名な版元「大和屋」のものである。**「唐美人図」**（図 12）と**「唐土婦人納涼の図」**（図 13）は珍しく中国婦人を描いている。当時長崎に来航した中国船は、貿易を目的としたもので、女性が乗船してきた例は殆ど知られないことから、これら中国婦人を描いたものは、おそらく中国船によって舶載された絵画などから臨写したものと思われる。

図 7　「大清人」長崎桜町・針屋版

神戸市立博物館『南蛮堂コレクションと池長孟』

これらの「長崎版画」は、一部の蒐集家が関心を持った以外は、殆どが散逸したようで、現

[10] 神戸市立博物館『南蛮堂コレクションと池長孟』神戸市立博物館、2003 年 7 月、42 頁。

[11] 松浦章「清代鳥船と『長崎版画』」、『関西大学考古学資料室紀要』第 2 号、1985 年 3 月。
松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002 年 1 月、307～323 頁参照。

在では貴重な絵画資料となっている。

図 8 唐館書房之図（長崎版画　大和屋）

図 9　大清朝人（長崎版画）

図 10 唐人図（大和屋）

図 11 唐人図（大和屋）

図 12 唐美人図（木版）

図 13 唐土婦人納涼の図（大和屋）

Ⅲ　江戸時代漂着中国船の清朝中国人の画像資料

関西大学東西学術研究所では、これまで江戸時代における漂着唐船資料を 6 冊刊行してきた。[12]これらの資料集にはいずれも日本漂着時の記録された画像記録も収録されている。しかし全て

---

12 大庭脩編著『宝暦三年八丈島漂着南京船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-1、関西大学出版部、1985 年。
田中謙二・松浦章編著『文政九年遠州漂着得泰船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-2、関西大学出版部、1986 年。
松浦章編著『寛政元年土佐漂着安利船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-3、関西大学出版部、1989 年。
松浦章編著『文化五年土佐漂着江南商船郁長發資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-4、関西大学出版部、1989 年。
大庭脩編著『安永九年安房千倉漂着南京船元順号資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-5、関

に清朝中国人の画像資料が含まれているわけではないが、時々刻々の中国人の人物像として貴重である。それは高位高官であれは画像資料が残されることが多々あるであろうが、一般庶民の画像資料が、「鎖国」の日本であったが故に残されたと言えるであろう。朝鮮半島に漂着した中国船の乗組員からの筆談記録は多いが、乗員の画像資料は未だ発見されていない。これに対して山陰地方に漂着した朝鮮船の朝鮮国人の画像資料は一部知られている。

『宝暦三年八丈島漂着南京船資料』には、八丈島に漂着した中国船の乗組員のほぼ全員の画像資料が収録されている。江戸時代を通じて一船の乗員の画像が判明する中国船は他にない。この船の船主高山輝は永年長崎貿易に関係した人物であった。高山輝の出身については、「浙江苕渓高山輝」[13]とあり、苕渓は河の名であるが、浙東地域を抽象的に示しているものと考えられる。

『長崎實録大成』巻十一、宝暦四年（1754）の条に、

> 八月十七日夕、豆州下田ヨリ八丈島漂流ノ高山輝、程劍南一船七十一人送來。此本船去酉十二月十日八丈島ニテ破船ノ由。（中略）五月二十四日ヨリ六月二十五日迄ニ下田ニ着。（中略）七月六日下田出船、海上無難ニテ八月十七日夕、長崎湊ニ着船ス。[14]

とあるように、宝暦三年（1753）十二月十日に八丈島に漂着した高山輝船は、同船が破船したため、五月末まで乗員が八丈島に滞在し、その後六月下旬まで伊豆下田に送られた。その後七月六日に下田を出帆して八月十七日に長崎に到着している。

彼らの絵姿は、八丈島に滞在中に狩野春潮によって描かれたものであり、右の図は船主高山輝の図（図 14）である。[15]

高山輝の長崎来航に関する中国側記録として考えられものに次の記録がある。

> 江南商人高日新自備資本、于乾隆十五年五月内、由乍浦出口、往販東洋、十六年九月、載回條銅等貨、洋中被風飄収閩省連江地方。[16]

とあり、江南商人の高日新が自己資本によって乾隆十五年（寛延三、1750）五月に浙江省の嘉興府平湖縣乍浦鎮より出港して日本に赴き、乾隆十六年（宝暦元、1751）九月に日本産の銅を

西大学出版部、1991 年。

藪田貫編著『寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-6、関西大学出版部、1997 年。

[13] 『通航一覧』巻二百三十、刊本『通航一覧』第六、55 頁。

[14] 『長崎実録大成』巻十一、『長崎文献叢書　第一集第二巻　長崎実録大成正編』長崎文献社、1973 年 12 月、275 頁。

[15]大庭脩編著『宝暦三年八丈島漂着南京船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-1、関西大学出版部、1985 年、第 1 図参照。

[16] 「閩海關造送題咨事例案册」乾隆十七年五月初二日付文書。

購入して帰帆中に福建省の閩江口左岸付近の福州府連江縣地方に漂着したとする記録である。ここに見られる江南商人高日新は姓から見て高山輝と同一人物かもしくは同族の可能性が高いと思われる。

『寛政元年土佐漂着安利船資料』は、寛政元年に土佐に漂着した安利船の記録で、その乗員の画像資料は、船主の朱心如の他に丁醒齊、余三光、王竒の四名の画像が「南京人人物圖」（図 15）として残されている。

寛政元年十二月二十二日に安利船は土佐の羽根浦に漂着したが、紀州へも漂流して、土佐の高知の浦戸湾に四月二日まで碇泊して、その後紀伊水道を航行し瀬戸内海を通り六月五日に長崎に入港した。[17]安利船の乗員の図は「護送日記」の中に見える。[18]図に見える朱心如、丁醒齊、余三光、王竒について「護送日記」の「酉番通船人名册」からその人物について触れたい。

船主朱心如　年三十三歳　杭州人　祀媽祖

財副丁醒齊　年五十三歳　湖州人　同

總管余三光　年四十二歳　閩縣人　同[19]

とあるように、この三人は安利船の運航、経営上の重要人物であり、王竒は随使の中に名が見える。

王竒　年二十四歳　杭州人　祀三官 [20]

とある。王竒のような下級乗員の絵姿が残されていることは貴重である。

『寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料』については、船主の汪晴川の画像だけが知られる。

『長崎志続編』巻十、唐船進港并雑事之部、享和元辛酉年（1801）の条に、

去申十一月九日乍浦出ノ唐船劉然乙、汪晴川船、於洋中逢逆風、吹キ流レ數日漂ヒ、同十二月四日、遠州山名郡湊村地先キ沖合ヒニ漂流イタシ、碇ヲ卸シ、･･･同九日十日不残上陸ス。當酉三月十九日當地ニ向ヒ護送ノ處、同五月十一日當湊エ挽送リ届ラル。[21]

とあるように、寛政十二年庚申（1800）十二月四日に遠州に漂着した劉然乙、汪晴川船は、長崎に送られるまでのほぼ四ヶ月遠州に滞在している間に描かれたのが「汪晴川」図（図 16）である。[22]精密な図ではないが、その雰囲気をほぼ伝えているであろう。

---

[17] 松浦章編著『寛政元年土佐漂着安利船資料』関西大学東西学術研究所資料集刊 13-3、関西大学出版部、1989 年、373～376 頁。

[18] 同書、18 頁。

[19] 同書、22 頁。

[20] 同書、25 頁。

[21]『長崎志続編』巻八、『長崎文献叢書第一集・第四巻　続長崎實録大成』長崎文献社、1974 年 11 月、199 頁。

[22] 藪田貫編『寛政十二年遠州漂着唐船萬勝號資料』図 3 参照。

このような事例はまだ多く残されていると思われる。さらに探索する必要があろう。

絵画的に見て極めて水準の高いと思われるのが江戸時代後期に描かれたとされる長崎出島出入りの絵師であった川原慶賀[23]が描いたとされる「唐人図」[24](図 17)であろう。川原慶賀はシーボルトが来日中にお抱え絵師のように重宝され、シーボルトのために日本の人物のみならず道具や動植物等様々な作品を残した絵師であり、その作品の水準も極めて高く、図 17「唐人図」も来日中の唐人の姿を写実的に描いた極めて重要な作品と言える。

Ⅳ　小結

江戸時代の人々にとって恒常的に異文化と接触できる地は長崎だけであった。その長崎で見ることが出来る頻度の高い外国人とは中国人であったろう。その清朝中国人について残された絵姿は、同時に清朝中国人の庶民の姿を伝える貴重な資料であることを明確に理解する必要があろう。

それらの資料源の一として関西大学東西学術研究所が現在までに刊行した 6 冊の「漂着唐船資料集」は有用な資料と言える。その幾つかの資料集のなかでもこと清朝中国人を描いたものとして最も美術的に高度な技量で描かれ絵画は、『宝暦三年八丈島漂着南京船資料』に収録された狩野春潮が描いた 64 名の中国人の姿である。狩野派は室町中期から明治初期における日本の最大の画派であった。その一族の狩野探幽（1602～1674）が徳川幕府の御用絵師と成って以降、江戸時代を通じて狩野派は幕府のみならず、その一族が各藩の絵師として隆盛を誇った。そのような画派に属した狩野春潮による美術的に高度な技量で描かれた清朝中国人の絵姿は、今日の写真にも替わりうる役割を持つ写実的な画像であると言える。

この狩野春潮による清朝中国人の絵姿は、乾隆年間に蘇州に居住し、後に乾隆帝に認められ宮廷画家となって『姑蘇繁華圖』のような写実的で高度な技量による絵画を残した徐揚[25]にも匹敵するものであり、江戸時代の日中交流に関する絵画の中でも特筆に値するであろう。これは春潮が八丈島に偶然とは言え流刑になっていたことから、このような貴重な画像資料が残されたのであるが、その偶然を大切にしたい。そして今後さらにこのような画像資料を、清朝中国の庶民の画像資料として活用する必要があろう。

---

[23]『川原慶賀展　鎖国の窓を開く : 出島の絵師　オランダ国立ライデン民族博物館所蔵』西武美術館、1980 年。

『川原慶賀展　幕末の“日本”を伝えるシーボルトの絵師』西武美術館、1987 年。

[24] 神戸市立博物館『南蛮堂コレクションと池長孟』神戸市立博物館、2003 年 7 月、88 頁。

[25] 蘇州市城建档案館、遼寧省博物館編『姑蘇繁華圖』文物出版社、1999 年 10 月。

【付記】

本稿は、中国杭州の浙江工商大学日本文化研究所が 2006 年 3 月 27 日に開催した「中国文献にみられる日本画像資料」シンポジウムにおいて報告した原稿に基づいている。なお本稿は、平成 18 年度私立大学学術高度化推進事業学術フロンティア事業「東アジアにおける文化情報の発信と受容」（代表：関西大学アジア文化交流研究センター長・松浦章）の成果の一部である。

図 14 高山輝と顔延發

図 15 朱心如等南京人物図

図 16 寧波船主汪晴川図

図 17　川原慶賀「唐人図」『南蛮堂コレクションと池長孟』88 頁。